

## A Group of Hermits and the Patern of Their Seclusive Lives in the Tang Dynasty

古川, 末喜  
佐賀大学文化教育学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9652>

---

出版情報 : 中国文学論集. 26, pp.19-36, 1997-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 唐代の隱士群と隱遁パターン

古川末喜

はじめに

隱遁をめぐる問題は中国に特徴的な文化現象として、もっと注目されていいと思う。隱遁文化の研究は、その重要さに比して研究の方はまだ多くないか、あるいは片寄っているように見える。<sup>1)</sup> これまで隱遁の研究というと、マインナーなイメージが強かったようだ。現政権に批判的ではあるが、結局はわがままで世に背を向けた逃避者というような。あるいはまた政治の腐敗、世の乱れという政治状況の下で出現する個人的な行為に過ぎないというような。

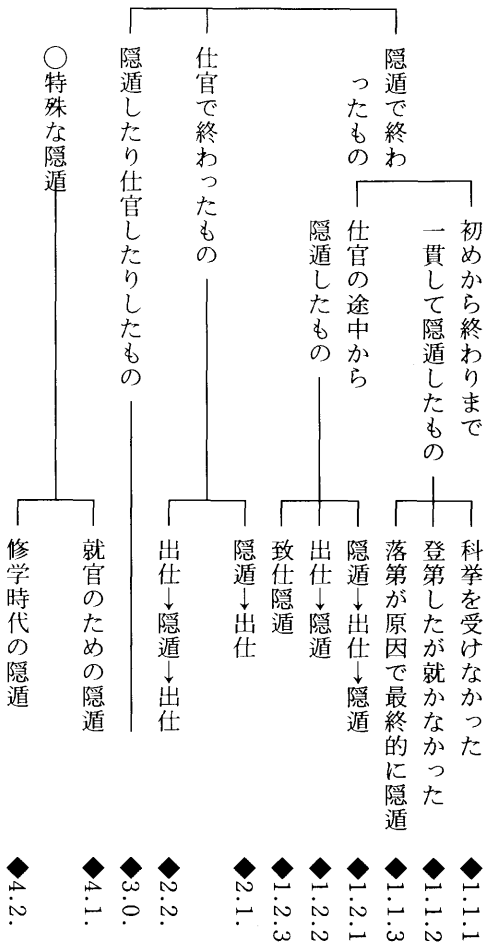
こういう隱遁観は、王毅の『園林与中国文化』上海人民出版社・1988によって面目を一新させられたかのようにある。彼はこれまで批判、抵抗、逃避、あるいは独善、自適のように個人的次元でしか捉えられて来なかった隱遁を、絶対君主の封建的国家体制を補完するものとして社会構造的にとらえた。従って中国封建社会の発展にそって、隱遁様式も漢魏晋から唐宋、元明清と変貌したのであり、その発展の足跡を我々にはっきりと示してくれた。同時に隱遁行為を一つの文化現象としてとらえ、隱遁こそが園林文化、すなわち唐宋以降の様々な文人趣味を發展させた母体であることを看破したのである。かくて彼以降の隱遁研究は、すぐれて文化研究ともなったのである。

従来、隱遁について論じたものは、先秦の老子・孔子から始まり竹林の七賢や陶淵明を中心にして、だいたいが漢魏六朝までである。その理由はと考えてみれば、隱遁は老荘あたりから始まって、陶淵明でピークを迎えて、あとは衰退期という図式が一般に出来上がっているからであろう。大室幹雄が「けれども、歴史的に見て、この唐帝

唐代の隱士群と隱遁パターン（古川）

国の時代は隠逸文化の衰退期にあった。少なくとも、魏・晋以来の江南諸王国における隆盛に比較すれば、このように判断することは可能なのであって、…『桃源の夢想』「隠者の社会学」108p、三省堂、1984というような叙述が、その雰囲気をよく反映している。もちろん、これはこれとして一つの道理のある言い分ではあるのだが。これまでの唐代の隠遁に関する研究で取り上げられてきた人物について言えば、いずれも王績、陸龜蒙など唐書隠逸伝中の人物か、または王維、孟浩然、李白、白居易、皮日休、司空図、方干、寒山子などで、その範囲はおおかた限られている。そのほか一般的な文学史的な著作などを含めても大差なく、まるで金太郎飴のように、いつでもどこでも同じような顔ぶれが出てくるというわけだ。

しかし唐代の隠士や隠遁の経験者たちは、果たしてそれだけなのか。いったい唐代三百年で、隠遁をした人はど



れくらいいたのか。これがわたしが最初に抱いた疑問であり、本稿執筆の動機であり目的である。このほか、唐代の隠士はどのように隠遁に入ったのか。隠遁後はどういう生活を送ったのか。彼らの隠遁生活を支えたものは物質的には、そして精神的には何だったのか。これらはいずれも隠遁の本質にかかわる興味深い問題であるが、今回は、上記の問題に限定して論じ、それらは次の課題としておきたい。

本稿で、隠士を拾い出す際の範囲は、唐才子伝、唐詩紀事、全唐詩小伝とした。<sup>(3)</sup> 即ちまずは何らかの文学作品を残しているものである。そして新旧唐書隠逸伝に載せる延べ二十九人の隠士は原則として除外した。<sup>(4)</sup>

さて、こうして拾った隠遁者たちを、本稿ではひとまず、一生の中で隠遁の占める割合の大きさによって、また隠遁と仕官の先後関係によって分類してみた。

これによって唐一代で、だいたいどのような隠遁経験者がどれぐらいいて、どのような隠遁をしていたのか、そのだいたいの枠組みが描き出されるのではないかと思う。唐三百年の隠遁行為の概略図も描かれていない現在の段階にあつては、こうした隠遁するもの達の外側の行動様式を、おおざっぱに整理した一枚の見取図があつてもいいと思う。たとえいささかあらつぽく、少々のあいまいさや矛盾があつたとしても、これによって今後、個々の分析的な隠遁研究をする上で、その隠遁者が唐全体の隠遁方式の中でどのあたりに位置するのか、そのおおよその見当をつけることが可能になるであらうから。<sup>(5)</sup>

以下、パターンごとに典型的な例を挙げながら紹介していくことにする。

#### ◆二・一 科擧を受けなかつた者で、初めから終わりまで一貫して隠遁したもの。

その代表として、晩唐の周朴の例をあげてみよう。周朴は睦州の人で、中年以後、閩の地に隠居した。富貴名利に恬淡で、あばら家に住み、山僧・漁翁と交わり、苦吟の癖があつた。大中十一年頃、福州刺史、嶺南東道節度使の楊夔が、乾符二年に福州刺史、福建都団練觀察使の李誨が、相前後して召したが応じなかつた。乾符六年、黄巢が福州に攻め入ったとき従わなかつたために殺される。周朴の隠遁のあり方は、内面の充実のために外物を否

定し、物質的に貧窮な生活をしたという『莊子』襄王篇に出てくる原憲に似る。

このほかには、盛唐では、陶淵明の子孫の陶岷は、家業を正直者にまかせて三十年近くも江湖を船で遊び回り、謝靈運を慕った。

晩唐では、『雲溪友議』を著した越州の范攄は、山水を放浪し生涯仕えなかった。宰相姚崇の末裔の姚岩傑は、詩酒を以て江南に遊び、傲慢で傍若無人、廬山に隠遁した。蜀の青城の味江山人・唐求是、市に来るたびに青牛に乗って来て、暮れには酔って帰った。

ただしここで科挙を受けなかったと言っても、ほんとうにそうだと断言できないところがある。科挙を受けた形跡が今日残された資料からは見出せないという面もあるからである。しかし唐全体では、少なくとも士人たるものが、門蔭などによらずに官吏になろうとする場合、はじめから科挙を受けなかったというのはそう多くはない。従って、この科挙を受けずにと隠遁したというのは、いささか性格的に奇矯なところがあるのである。

◆ 1.1.2. 科挙に合格したが官に就かなかったもの。

これは甚だ例が少ない。盛唐の崔良佐はおそらく玄宗朝に明経科に登第。湖城主簿を授けられたが、母の喪をもって仕えなかった。衛州共城県白鹿山に隠遁し、詩・易・書・春秋を修めた。ただし、子の崔元翰は建中二年、状元で進士科に及第した。

◆ 1.1.3. 主として科挙落第が原因で仕官せず、生涯隠遁したもの。

このタイプの典型として、盛唐の沈千運をあげてみよう。

沈千運は、呉興の人。天宝年間、科挙に何度も落第。襄、鄧の間に遊び、名公を訪問した。五十歳頃、家族を連れて濮上に来て、おそらく農業経営にたずさわった。その後、汝墳の別業に帰り隠遁した。沈四逸人、沈四逸士、

沈四山人などと呼ばれる。肅宗の時召されたが、辞して応じなかった。

ほかに盛唐では、孟浩然は、四十歳ごろまで出仕を求めまたは科挙に応じるため何回か上京したがすべて敗れ、一時張九齡の幕府で補佐役となったが、まもなく襄陽に帰隠した。張彪は、おそらく落第後、嵩山に隠遁。母を奉じて安史の乱から避難した。元晟は蕭穎士に師事した。科挙に落第。後に、杭州の于潛、泉、潛山に帰隠した。

中唐では、劉方平は、科挙落第後、軍幕に入り、三十余歳の時、潁陽の大谷に隠遁した。山水画を善くした。李勉に招かれて朝廷に推薦されたが、辞して隱居の地に帰った。于鵠はおそらく科挙に応じて落第。三十歳ごろ漢陽の山を買ひ隠遁した。その後、荆南節度使樊沢の幕府に入ったが、府を辞めたあと、また山に帰ったようである。長孫佐輔は落第後、江西の吉州刺史の弟を頼って行った。官に就かず隠遁して終わった。徐凝は、はじめ施肩吾と共に落第した。杭州に行き、張祐と州の進士推薦の首位を争うが、二人とも辞めて帰った。洛陽で成就する所なく老年、睦州に帰隠した。張祐は何度も落第、江南の幕府に出入した。晩年、丹陽に室を築き樹を植え隠遁した。

晩唐では、陳陶は落第後、幕府に出入した。名山に遊び、三教の布衣と自称した。唐末の乱を避け洪州に隠遁した。柑橘類を植え、山童に売らせて自給した。陸龜蒙は新唐書隱逸伝中の人。落第後、科挙に応じなかった。江南の幕府に出入し、晩年、松江に帰隠した。数百畝の湿田を購入し営農したが、時に貧窮に苦しんだ。茶を好み、品を判じた。張為は、進士には及第したが、就官できずに、長沙に至り、落魄すること数年、詩酒にふけり、後に釣台山に隠遁して道を訪ねた。『詩人主客図』を著した。方干は落第後、会稽に隠遁、鏡湖で漁した。家貧しく、詩酒をもって楽しんだ。浙東觀察使が朝廷に推薦しようとしたが、事ならず、布衣で終わった。浙中の山水名勝を多く詠じた。李昭象は、応試の事成らず。秋浦に戻り、九華山に帰隠した。張喬、顧雲らと方外の友となった。後の五代呉の建国者の楊行密に招かれたが従わなかった。張喬は、試せられた「月中桂」詩が有名になったが落第。黄巢の乱をきっかけに、李昭象よりやや遅れて、伍喬と九華山に帰隠した。李昭象、顧雲らと方外の友となった。

以上の例からわかるように、実際には、落第以後きれいさっぱりと隠遁したというものはほとんどない。落第後もいろいろな手立てで出仕を追及している。なかには一時幕吏になったものもある（朝官ではないのでそういう場合もここに分類した）。しかし最終的には隠遁した。だからこの人達が、出仕コースの最初の関門でつまづく事が

なかったならば、はたして隠遁したかどうかはわからない。隠遁期間の長いものが、隠遁への執着度が強いとは限らないわけである。いわば往生際のわるい隠遁で、だから晩年に隠遁というケースが多い。言うまでもないことだが、科挙落第が隠遁の原因というのがこれまではなかったことであり、これが唐代及びそれ以後の特徴となっている。

◆12.1. 隠遁↓出仕↓隠遁 出仕前から隠遁していたが、官の途中で再び隠遁し、最終的に隠遁で終わったもの。

代表で中唐の李涉を見てみよう。李涉は若年のころ乱を避けて弟李渤と廬山白鹿洞に隠遁した。後、終南（或は少室山）に移った。四十歳前ごろには召されて節度使従事となり、以後、入朝して二十年以上の官歴を経て、官は太学博士に至った。その間二、三度左遷された。最後は流謫の地の康州から洛陽に帰り、隠遁して終わった。

このほか盛唐では、張諲は、初め少室山山麓に隠遁。科挙に応じて、官は刑部員外郎に到った。天宝年間、官を捨て少室山の旧居に帰隠した。李頎は、初め十年ほど潁陽に隠遁。その後、進士に登第、官は新郷県尉、おそらく官歴は県尉どまり。数年後の開元二十四年ごろ潁陽に隠遁した。

中唐では、王季友は、家貧しく滑州の山中に隠遁。万巻の書を暗誦した。李勉に取り立てられ華陰県尉や幕府の職についた。出仕すること数年ほどで、まもなく帰隠した。朱放は、安史の乱を避けて越州・杭州の間に隠遁。召されて節度参謀となったが、辞めて丹陽に隠遁。韜晦奇才科で右拾遺に召され上京したが、病を理由に辞して帰った。

晩唐の王季文は、若くして名利を厭い、九華山に隠遁したが、咸通年間に進士科登第。秘書郎を授けられたが、まもなく病を理由に九華山に帰隠した。

以上の場合、仕官前の隠遁は、科挙の受験勉強のための隠遁だったことが多い。

◆1.2.2. 出仕↓隠遁 仕官の途中から隠遁し、最終的に隠遁で終わったもの。

代表例として、盛唐の常建をみてみよう。常建は開元十五年、王昌齡とともに進士科登第。官はおそらく県尉どまり。官途に失意し琴酒にひたつた。終南山中の太白山、紫閣山に遊び、隠遁の志があった。後、湖北、湖南に遊び、天宝年間、ついに鄂渚に隠遁した。天宝七、八載ごろ詩を作り、竜標に左遷された王昌齡・張價に隠遁をすすめた。おそらく安史の乱後ほどなくして卒した。

このほか盛唐では、祖詠は開元十二年、進士登第。おそらく官途不遇のため汝墳の山荘に移り住み、農、漁、樵をもって終わった。元徳秀は、進士登第後、南和県尉、北衙禁軍の竜武録事參軍。家貧しく、求めて魯山の県令となり、任期満ちて伊水の陸渾の山水を愛しそのまま隠遁した。酒をたしなみ琴をひいて自ら楽しんだ。家は質素で土地は少なく、僕妾はいなかった。閩防は進士登第後、官は大理評事。湖北省某地の司戸に左遷。仕官歴十年に満たずして、終南山の石門の豊徳寺付近に草堂を建て隠遁し読書にいそしんだ。

中唐では、鄒純は、進士に登第し、官は諫議大夫、中書舎人に至る。宰相に憎まれて官を辞め、洛陽に隠遁すること十年、伊川田父と号した。その後左庶子、集賢字士に召されたが、年老を以て辞し、太子詹事致仕を許された。張志和は、新唐書隱逸伝中の人。少くして明経科に合格。連座して左遷され、許されて還れば親は既に死に、そのまま官を辞め、隠遁して烟波釣徒と号した。丸太小屋の住い、自然木の机、豹の皮を敷き蒲団に、草履は棕櫚製、杯はほら貝という原始的な隠遁生活で、肅宗にも寵愛された。

費冠卿は元和二年に進士科登第。母の病を知り帰郷したが、母は既に没した後だった。仕官は親のためだったのと、ついに郷里の九華山に隠遁。十数年後、殿中侍御史の李行修が推薦し、詔で右拾遺を拜したが辞して就かず、隠遁して終わった。

晩唐では、李群玉は何回か科挙に落第した。令狐綯の推薦で、弘文館校書郎に就いた。おそらく讒言に遭い、官を辞して澧州に帰隠した。雍陶は進士科登第後、官は国子博士など。四川の簡州刺史の後、官を辞して廬山に隠遁



して療養した。

司空図は進士科に登第し官は礼部郎中に至る。黄巢の乱で河中に退居。中書舎人を拜したがまもなく辞した。諫議大夫、戸部侍郎、兵部侍郎などに召されたが就かなかつた。哀帝の即位の年、中条山の王官谷に帰隠した。祭りのときには村の父老と同席して楽しんだ。後梁の朱全忠が礼部尚書に召したが就かなかつた。哀帝が殺されたのを聞き、絶食して死んだ。

鄭谷は、咸通十哲の一人。何度も進士科に落第。黄巢の乱の終結後に登第した。官は右拾遺、補闕、都官郎中など。天復二、三年ごろ、宜春の仰山書堂に帰隠した。陳瓌は、剛直な性格で、自分が評価しない人とは交わらなかつた。觀察使の郭銓の軍幕にいたが、郭銓の娘婿とあわず、一家を引き連れて茅山に隠遁し禅を学んだ。王駕は進士科に登第し官は校書郎。乾寧四年ごろに礼部員外郎の職にあつた。後、官を捨て蒲州に帰隠した。

(このほか隠↓仕↓隠、仕↓隠のタイプでは、中唐の丘丹・元友讓・胡杲、晩唐・唐末の余鏞・李咸用・康駟・翁洮・歐陽持・張鴻などをあげることができるが、資料に不確かな所があるので名前だけにとどめておく。)

◆1.2.3. 致仕隱遁 仕官の途中から官を捨てて隱遁してしまうことはできなかったが、定年退官後に隱遁的生活を実現したもの。

唐制では、職事官は七十歳で定年退官を迎える。但し五品以上は、本人が上表し皇帝の裁可を仰いではじめて実現し、五品以上は在職時の半分の俸禄が終生(天宝九年以後)支給されることになっている。もちろんこれは原則であり、健康上の理由で七十以下でも致仕できるし、七十過ぎてても致仕を願い出ない場合もあった。白居易は「秦中吟」の「不致仕」の詩で、八、九十になって身体が衰えたのに名利を貪って致仕を願い出ない貪欲な高官を風刺している。

定年退職後はだれしもがおのずと隱遁的の日々を送ることができるようになるのであり、定年後をことさらに隱遁するなどと呼ぶのは、本来原理的におかしいはずである。しかし実際には、本人が致仕を願い出たという形式があ

り、その部分に、まだ幾らか保留されている仕官の権利・チャンスを手を自らの意志で投げ捨ててしまったという点をあえて見出すことにして、かりに「致仕隠遁」と呼び、二、三の例をあげておこうと思う。

この致仕隠遁の代表は何といっても白居易である。彼は四十歳の時に母が亡くなり、任を去って故郷の華州下邦金氏村に退居して喪に服した。喪があけて間もなく江州司馬に左遷。五十一歳、外任を求めて杭州刺史。五十八歳、洛陽に閑職を求めて太子賓客分司東都。「中隱」の詩を作った。六十四歳、太子少傅分司東都に職位が進む。七十一歳、刑部尚書で致仕、唐制によって半俸を支給された。七十四歳、洛陽の履道里の屋敷で七老会をつくった。翌年亡くなった。致仕後の五年間の余生も、中隱時代の延長線上にあり、閑適な生活を送った。若いときから隠遁的志向を一方に強く持っていた白居易は、前代からの朝隱や吏隱などの理論をさらに押し進めて中隱の理論を打ち立て、実際に洛陽勤務の官職について、半ば官吏、半ば隠遁という中隱理論を実践した。だが、結局、官を去って隠遁に踏み出すことはできなかった。彼の中隱理論とその生活実践は後世にも大きい影響を与え、それ自体重要な意義を持つ研究課題であるが、隠遁の様々なパターンからすると、吏隱の域を出るものではなかった。

このほか、この致仕隠遁にあげられるものでは、中唐の鄭薰は、太和二年に進士登第後、中書舍人、礼部侍郎、吏部侍郎などを経て、太子少師で致仕。居所を隱岩と号し、庭に松を植え、自ら七松処士（居士）と号した。晩唐の張策は、弱冠前に剃髪して僧となり、広明末、還俗して朱全忠に投じた。後梁で宰相となり、開平二年、刑部尚書で致仕。晩年、洛陽で凶書・琴酒をもって自適した。致仕後四、五年で亡くなった。

### ◆2.1. 隠遁↓出仕 はじめ隠遁していたが途中から隠遁をやめて出仕し、最後に官で終わったもの。

この場合、もともと官を得るのが動機で隠遁していたというケースがあるが、そうだとはいきり分かる場合は、別に「**1.1**」就官のための隠遁／終南捷徑」の項に分類することにした。これは、次の「**2.2**」出仕↓隠遁↓出仕」の分類も同じである。

このタイプで代表的な例を二つあげよう。まず中唐の竇常は、三十三歳ごろ、進士に及第したが、すぐに父が亡

くなったので、塩鉄転運府の小吏となって一家を養いながら、約十年、常州の毘陵に<sup>5</sup>隱遁した。継母の死後、広陵の柳楊に移り住みまた約十年隱遁。泉を流し竹を植え、机にむかい書を著した。五十二歳ごろ淮南節度参謀となり、六十四歳ごろ入朝して侍御史。最後は国子祭酒で致仕した。

次に晩唐の王亀は仕進を樂しまず、科擧の勉強をしなかった。京城では永達里の園林の奥深くに書齋を造って住み「半隱亭」と名付けた。父の赴任に従って行き、それぞれの赴任先で隱者的生活をおくった。河中では、中条山の谷に草堂を作って山人道士と遊び、洛陽では、竜門の西谷に「松齋」を構えて隱遁。興元では漢陽の竜山に隱舎を建てて住んだ。武宗がその閑逸を知り、左拾遺に召したが、就かなかつた。父の死後、右補闕に召され、官は侍御史、御史大夫、浙東觀察使に至った。

このほか、初唐では、武平一は、武后の一族であることによる禍をおそれ、嵩山に隱遁して仏教を学んだ。武后に召されたが応ぜず。中宗の時に召され、迫られて起居舎人になった。官は考功員外郎に至った。

盛唐では、房瑄は弘文館の学生となり、性、隱遁を好み、呂向と陸渾の山中に隱遁して学を修めた。二十八歳で、封禪書を献上して張説に認められ秘書省校書郎となり、最後は宰相になった。呂向は、少くして孤。房瑄と陸渾の山中に隱遁した。開元十年、召されて翰林に入り、兼集賢院校理、侍太子及び諸王為文章。後、官は工部侍郎に至った。

中唐では、令狐峒は、天宝十五載、進士に登第したが、安史の乱に遭遇し、終南山に隱遁した。乱後、華原県尉に、さらに楊綰の推薦で右拾遺となった。官は礼部侍郎に至った。朱巨川は、年二十で明経に及第。職に就かず安史の乱をはさんで二十年近く郷里に隱遁した。代宗の初めに左衛率府兵曹参軍となり、官は知制誥、中書舎人等に至った。齊抗は、七、八歳にして孤。十六歳の頃、安史の乱を避け、母を奉じて越州に隱遁し読書した。三十八歳のとき寿州刺史張鎰の判官となり、官は宰相に至った。陽城は旧唐書隱逸伝、新唐書卓行伝中の人。進士登第後、中条山に隱遁し徳行で世に聞こえた。五十一歳の時、李泌が推薦し、著作郎に就き、坐して道州刺史で卒した。竇群は、三十歳ころまで十年間、科擧に応ぜず隱遁した。その後春秋を学び書を著した。四十三歳のとき推薦され左拾遺になり、官は刺史、觀察使、経略使などに至った。李渤は、廬山、嵩山に隱遁して学を治めた。三十八歳のと

き洛陽に移り、朝政の闕を上奏。四十二歳のとき召されて著作郎、官は右補闕、諫議大夫、給事中などを歴任した。李虞は、初め華陽山に隠遁した。長慶中に族叔の李紳を怨み、宰相李逢吉に依り、長慶四年、擢かれて拾遺となった。その後、官は左補闕、岳州刺史に至った。

晩唐では、崔道融は、唐末の戦乱を避けて母と永嘉に至り、隠遁して東甌散人と号した。昭宗のとき召されて、親を養うため永嘉県令となった。

◆2.2. 出仕↓隠遁↓出仕 はじめ仕官していたが辞めて隠遁し、再び出仕して、最後は官で終わったもの。

この代表例として、盛唐の儲光羲の場合をあげてみよう。儲光羲は潤州延陵の人。科挙に二度落第したが、二十一歳ころ進士に及第し、馮翊県の佐官となった。安宜、下邳、汜水などの県尉を歴任した。二十八歳ごろ官を辞めて帰郷し、三十六歳ごろ上京して、終南山に六、七年ばかり隠遁した。四十二、三歳ころ、太祝に任じられ、その後、觀察御史となった。安史の乱で賊軍に落ち、洛陽で安祿山の政府下で位についた。天宝十五載または至徳元載、脱出して江漢經由で入京したが獄につながれ、南方に流された。

このほか初唐では、劉幽求は、四十代半ばで制科に合格。閩中尉を授けられたが刺史に礼されず、官を捨てて帰った。数年後に朝邑尉を授けられ、その後、官は宰相にまで至った。尹元凱ははじめ磁州司倉參軍となり、事に座して免官されそのまま山林に隠遁した。三十年近くも仕進を求めなかった。詔によって右補闕を拜し、官は并州司馬に終った。

盛唐では、馬嘉運は少くして僧となり、還俗して儒学を治めた。貞観のはじめ越王東閣祭酒となるが、しばらくして白鹿山に隠遁。貞観十一年、召されて太学博士、兼弘文館学士になり、官は国士博士に至った。郝処俊は、貞観年間、進士科に合格して著作佐郎となった。藤王友に転じ、王府の官属となるを恥じ官を捨てて帰耕。久しくして召されて太子司議郎となり、官は侍中に至った。王之渙は門蔭によって冀州衡水主簿となったが、人に誣告され官を辞して家に帰った。十五年間仕えず。足跡は黄河南北数千里に及んだ（ここでは一応隠遁に入れた）。晩年、再

唐代の隠士群と隠遁パターン（古川）

び入仕し莫州文安尉となった。基母潜は三十余歳で進士に及第。秘書省校書郎のとき、五十前後で官を捨て江東に帰った。十年ほど隠遁して、再び出仕して右拾遺となった。官は、著作郎で終った。

晩唐では、陸希声は、初め藩鎮の属僚となっていたが、後に義興に隠遁し君陽遁叟と号した。久しくして、召されて右拾遺となり、官は宰相に至った。陳岳は科挙に落第。中和二年、鎮南節度使鍾伝のもとで觀察判官となった。同僚に誹謗され、南郭に隠遁し著述を楽しんだ。朝廷が招くと聞いて、鍾伝がまた節度從事となした。羅隱は、科挙に落第。三十八歳以後、江南の諸鎮に仕えたが意を得ず。五十歳前後、黄巢の乱を避け池州に隠遁した。五十五歳、杭州刺史の錢鏐に投じ、官は呉越国で給事中に至った。鄭良士は進士に落第。三十八歳の時、詩五百篇を献じて国子四門博士になり、四十六歳の時、官を捨て帰隱した。六十歳の時、後梁王の辟命に応じ、官は左散騎常侍兼御史大夫に至った。

◆3.0. 隠遁したり仕官したりしたもの 隠遁と仕官の先後は問わないが、いずれにしろ隠遁と仕官を繰り返すもの。

初唐の王績は新旧唐書隱逸伝中の人。隋の大業九年、孝悌廉潔科に挙げられ秘書省正字。朝に在るを樂しまず、外職を乞いて六合県丞となった。翌年、官を捨て帰隱し嵩山、江南、河北などに遊んだ。唐の武徳五年、前官を以待詔門下省となるが、五年後の三十八歳、辞めて帰った。四十八歳、家貧しきを以て太楽丞となるが、翌年辞めて帰った。五十五歳で家に卒した。

盛唐の李白は、二十三歳ごろまでに郷里の戴天山、岷山に隠遁して学を修めた。四十歳、孔巢父らと徂徠山に隠遁して竹溪六逸と号された。四十二歳、召されて翰林供奉に。四十四歳、長安から放逐された。安史の乱を避けて廬山の屏風壘に隠遁したが、招かれて永王璘の幕に入った。

中唐では、李泌は、上書して待詔翰林に招かれ東宮に供奉した。左遷されて名山に逃げ隠遁した。三十五歳、安史の乱で肅宗に信を得、官は固辞したが、権は宰相を越えるほどだった。翌年、帰隱を許され衡岳に三品の給与を

もって隠遁した。四十一歳、代宗に召されて翰林学士。六十三歳、徳宗に召されて左散騎常侍となり官は宰相に至った。

朱湾をはじめ蘇州刺史や湖州刺史に謁し、おそらく就職を依頼したが成就せず。大暦の初め江南に隠遁した。大暦八年、李勉に召されて節度使の従事。ほぼ十年後、貞元中に宣州で官に就いた（ようであり）、後にまた宣州に隠遁した。池州刺史が欠けたので仮撰池州刺史となった。

温造は官吏となるを喜ばず、少くして王屋山に隠遁した。二十歳のころ寿州刺史張建封の賓客となり、二十三歳、下邳に帰隠した。三十二歳、張建封が強いて節度参謀となし、幽州に使いした。功成り、徳宗が諫官に就けようとしたが成らず。一時、東都に隠遁した。一時幕府に入る。五十六歳で京兆府司録参軍。その後、官は礼部尚書にまで至った。

#### ◆4.1. 就官のための隠遁

中国の伝統的な考え方では、往々にして野に隠士・賢者が埋もれており、為政者は彼らを捜し出して出仕のチャンスを与えなければならぬ。これは為政者側が人材発掘に熱心であることを示す人心収攬のためのパフォーマンスではあるのだが、一方、有徳かつ清廉なはずの彼らに政治にコミットしてもらうことが、この濁世に一服の清涼剤をもたらす効果以上のものがあるかもしれない、なかば本気で信じ込まれてもいた。

唐代では刺史や觀察使などは隠士を中央に推薦することができたし、朝廷側も隠士を捜し出して推薦せよという詔をしばしば発した。隠士の推薦入仕のコースが、唐代ではほとんど制度と言っていいように出来上がっていた。しかもかなり太いパイプとして中央に通じていた。与えられる官位は、節度使などの幕府の属僚となるほかに、朝廷の補闕、拾遺などの諫官系、学士、博士などの学官系、翰林待詔などの側近系が多かった。

となれば、科挙や蔭の正規なルートでうまく仕官できない場合に、この隠遁から仕官するというコースを選ぶ者が出てくるのは当然である。かくてこの出仕のための隠遁がはじまるのである。

唐代の隠士群と隠遁パターン（古川）

今日の我々の目からすれば、この種の隠遁は、一種のマヌーバー的獵官運動ということになり、あまり褒められたことではなさそうである。だが、官吏となれば兵役・雜役免除など種々の特権が転がり込むし、さらには朝官となつて、身に付けた儒家的素養で天子を助け人民に恩恵をもたらすというのが、中国士大夫の理想であるからには、その前提をなす就官のためには、大方のことが是認されてくる。直訴のような天子への上書、科挙の事前運動、人事担当者への自己宣伝の手紙など、みな然り。そう考えてくればこの就官のための隠遁も、言わば五十歩百歩で、随分とアク抜きさされて見えて来はしないか。だから中国では、仕官の手段としての隠遁も相応に歴史が古いことになる。

この代表例としてあげるべきは、まず初唐の盧藏用であろう。彼ははじめ進士科は及第したものの任用されなかった。そこで兄とともに終南山、少室山に隠遁し、練氣、辟穀を学んだ。長安年間に召されて左拾遺となり、これを皮切りとして出世コースを進み、吏部侍郎、黄門侍郎、工部侍郎、尚書右丞にまで至った。太平公主に附したことで坐した。新唐書本伝は「始め山中に隠れし時、当世に意有り、人目して随駕隠士と為す」と述べ、司馬承禎が「仕宦の捷徑」と言ったことを載せる（ただし旧唐書本伝は「初め隠居の時は、貞儉の操有り」だったと言ひ、評価が微妙に違う）。

このほか盛唐では房琯、李白などがあげられる（既出）。晩唐では張濬は科挙に落第して金鳳山に隠遁した。鬼谷縦横の術を学びその術策で貴仕をねらった。おそらく四、五十歳の頃、枢密使の楊復恭の推薦で処士から太常博士に抜擢された。官は宰相に至った。

このほかにも、「隠遁↓出仕」、「出仕↓隠遁↓出仕」の場合から多くをあげることができよう。その二つのタイプの隠遁には、すべてこの種の疑いが無いわけではない。実際、純粹な隠遁か、そうでないかはなかなか見極めがむずかしい。主観的に純粹だった隠遁も、結果としてみれば終南捷徑と見られても仕方ないところがある。だからここでは、かりに典型的な例をあげるとどめた。

#### ◆4.2. 修学時代の隠遁

青年時代に名山名刹に閉居して学を修めている状況を、本人や回りが隠遁中と呼ぶことがある。清貧の中で世事を問わず勉学にいそむ姿が隠遁に類似することから、そう呼ばれるのかもしれない。修学の主な目的は、ほとんどの場合が科擧の受験勉強である。しかし科擧に応じなかった者もいる。学問や政策・政治論が認められて官に就いたものもいる。修学時代に名山名刹に「隠遁」して学問を修めていれば人の注目を受けやすく、自ずと名声もあがりやすかったであろう。隠遁していたという評判が受験に有利に働いたことも考えられる。名山名刹には書籍が豊富であったため、それを求めて隠遁修学したものもいる。この隠遁修学には、孤貧、家貧というケース、つまり早くに父を亡くしたり、家が貧しかったりしたものが多い。貴族社会でならそういう階層は、普通は官僚への道は閉ざされていただろう。ところが唐代の科擧制度では、自前で受験勉強の設備・条件を整えられない者も受験できるようになった。このことと、唐代では隠遁の評価が概して高かったことを考え合わせれば、この隠遁修学という現象は極めて唐代的なものかもしれない。

盛唐では、房琯は呂向と陸渾の伊陽山中に十余年も隠遁修学し、李白は十八から二十三歳ごろ匡山で隠遁修学した。張諱は、初め河南府登封県の少室山山麓に、十年余り隠遁して読書し、その後科擧に応じた。（以上既出）

中唐では、楊衡・苻載は、はじめ青城山に隠遁、のち李元象・王簡言が加わって廬山に隠遁して山中四友と号し、勉学につとめた。劉長卿は少くして嵩山で隠遁読書した。

そのほかざっとみても、中唐の孟郊、宋濟、李逢吉、鮑溶、姚合、裴休、晚唐の徐商、九華四俊の張喬・許棠・張蠙・周繇、皮日休、王季文、曹松、杜荀鶴、黃損など、その例は多数にのぼる。



おわりに

最後に、以上の作業でわかった限りでの、隱遁の動機などの特徴についてまとめておく。

まず、門蔭で仕官したものは少なく、科擧出身者が圧倒的に多い。名門もあまりいない。隱遁前の官もほとんどが中下級の官位で、高位高官は少ない。これは六朝の貴族の隱遁と違う点である。

隱遁の動機は、官界での人間関係の不愉快さや左遷や不遇など官途への失意・挫折によるものが当然ながら多い。親の死に目に遭遇してというのものもある。これは深い無常感を感じてのことであろうが、もうひとつこの時代には、士たるものは必ず出仕すべきという通念から自由になり始めていたらしいことがうかがえる。山水の美に魅了されたためとはつきり記載するものが少ない。唐人も山水を愛好したのだが、ただ西晋から南朝にかけての文献がしきりに山水美に惹かれて隱遁したなどと記載するのは違いがある。また名利に淡泊とか、狷介で人と合わないとかの性格的な理由による隱遁が少ないのも、前時代とは違う。病氣療養のためというもつともな理由もある。以上の場合、隱遁先はほとんどが故居や先祖伝来の莊園地で、帰隱のケースが圧倒的に多い。安史の乱や諸藩鎮の反乱、唐末の戦乱を避けて隱遁した者もいる。これは戦乱や王朝の衰退など「無道の世」を避けるといういつの時代でもあるオーソドックスな理由である。この場合は隱遁先は江南が多い。

今後の研究の進展によって、隱士の数はもっと増え、タイプ別の隱士の分類にも修正すべき点が少なからず現われてくるであろう。それは、今後に期すとして、以上の分類と説明からだけでも、一口に隱遁と言っても、いかにいろいろのタイプがあったかが明らかになったと思う。本稿が唐代隱遁研究の叩き台となれば、それで本稿の目的は果たされたことになる。

- (1) 例えば元の散曲というジャンルの作品が、濃厚な隠遁的気分覆われているという事実はあまり知られていない。叶松林「元散曲消極避世思想探求」『荆門大学学报／哲社版』1991-2、朱万曙「元散曲隱逸主題再認識」『文学遺産』1995-6
- (2) 単行本に限れば、蒋星煜『中国隠士与中国文化』中華書局、1943、根本誠『専制社会における抵抗精神／中国的隠逸の研究』創元社、1952、富士正晴『中国の隠者』岩波書店、1973、小林昇『中国・日本における歴史観と隠逸思想』早稲田大学出版部、1983、小尾郊一『中国の隠遁思想』中央公論社、1988、轟雄前『中国隠士』湖南文芸出版社、1991など、論述の中心は唐以前である。唐代の隠遁も取り上げたものには、神楽岡昌俊『中国における隠逸思想の研究』ベリかん社、1993、高敏『隠士伝』河南人民出版社、1994がある。
- (3) ただしこの作業は、結果的にはほとんどが、周祖諤主編『中国文学家大辞典／唐五代卷』中華書局、1992に拠るものとなったので、各人物の伝記的根拠については同辞典を参照されたい。同書は今日までの唐代文学者の伝記研究の集大成であり、そのひとつの到達点を極めているといえる。唐才子伝については、傅璇琮主編『唐才子伝校箋／全五冊』中華書局、1987-1995を参照した（特に陶敏・陳尚君補正の第五冊は同辞典が参照していないので重要である）。本稿中での隠士の略伝がこれらに従っていないものは、近年の研究論文などによって、私の判断で改めた所である。
- (4) 本稿で紹介した隠士で、旧唐書または新唐書隠逸伝に載せるものは、王績、陽城、張志和、陸龜蒙の四人である。
- (5) 本来なら隠士の作品を通して内面にまで分け入る研究が必要である。必ずしも隠士ではないが、作品を彼らの気分、心理にまで立ち入って隠遁志向を分析していく近年の葛曉音、林継中、蔣寅、赤井益久氏らの研究が注目される。これによって中唐詩には吏隠的気分が濃厚にあることがその表現方式の解明とともに実証されつつある。ただこれは、主として吏隠のありかたという点からの分析であり、ここでの私の問題意識とは若干異なる。
- (6) 「七十而致仕、礼法有明文。何乃貪榮者、斯言如不聞。可憐八九十、齒墮双眸昏、朝露貪名利、夕陽憂子孫。挂冠願

唐代の隠士群と隠遁パターン（古川）

翠綏、懸車惜朱輪。金章腰不勝、偃僂入君門。……」（朱金城『白居易集箋校』卷二諷諭二／花房作品番号0079）  
進士及第後、朝廷の官吏とならずに郷里で小吏となっている期間を、旧唐書卷二五〇は「結廬植樹、不求苟進、以講学著書為事、凡二十年不出」とややぼかし、新唐書卷二五〇ははっきり「不肯調、……：：：：：隱居二十年」と書く。よってこの場合はこの期間を隱遁中とした。